

# がん以外の死因増と年齢

## がん社会 を診る

中川 恵一

感染し、血液の中に入り込み、全身に炎症反応が広がって、多臓器不全となってしまったのです。

敗血症は昨今、高齢者を中心に増えていて、国内での年間死亡数は10万人を超えています。がんによる死亡は38万人ですから、約4分の1に相当する重大な死因になっています。

高齢でなくても、がんの抗がん剤治療には白血球が減少して敗血症を起こすリスクが

常にあり、がん専門医にとっても注意が必要な病態です。

幸い母は敗血症を乗り越えましたが、長く臥床（がしよ）していたため、立つこともできなくなってしまうしました。がん患者にもしばしばみられる「廃用症候群」です。

東大病院からリハビリ病院に転院し、4カ月近く訓練を続け、9月半ばに自宅に戻りました。その後は介護保険を使いながら自宅で過ごしてきました。先月は、前回と同様に転倒がきっかけの尿路感染により、持病の心臓病が悪化したことで再度の入院となりました。

今回の転倒でも、母は肋骨を骨折しています。高齢者が転ぶと、痛みのためトイレに行かなくなり、尿路感染症のリスクが高まります。細菌感染に対抗するには、酸素や栄養を使って免疫細胞を動員す

る必要があり、心臓にも負担がかかります。高齢者の転倒は「万病の元」です。

母を診ていると、がんの心配など頭から消えてしまいました。がんが死因に占める割合は、男性は65〜69歳がピークで、この年代でがん死亡は死因全体の半分弱を占めます。女性は55〜59歳がピークで、死亡の6割近くががんによるものです。

しかし、がんで死亡する割合は男性では70代以降、女性では65歳以降は低下し、老衰や心臓病といったがん以外の病気で死亡する割合が高くなります。

がんによる死亡数自体は年齢とともに増えますが、死因としてのがんの割合は65〜70歳からは減っていきます。とくに80歳以降はがん以外の死亡を避けることが大切です。母もがんで死ぬことはないと思います。ただただ、転ばないでくれと祈るばかりです。

先月、母が東大病院に2度目の入院をしました。前回は約1カ月の長期入院でしたが、今回は1週間で自宅に戻ることができました。

89歳の母は高層マンションで長く一人暮らしを続けてきました。2022年4月の末に脚立から落ちて、腰椎の圧迫骨折を起こしました。

転倒した翌日に「敗血症」を併発してショック状態となり、東大病院に緊急入院となりました。水分補給が足りなかったためか尿道から細菌が



イラスト 中村 久美